

丹羽 謙治

## Ⅱ 『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』の作者と伝来

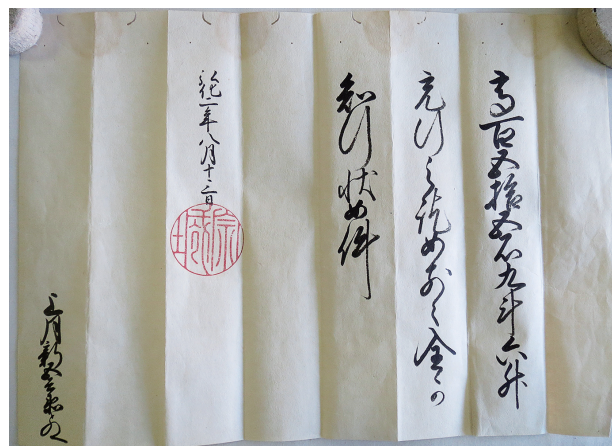
### 1. はじめに

鹿児島大学附属図書館蔵の『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』の2巻は、上月行敬<sup>こうつきゆきよし</sup>の筆になるものであり、作者の上月行敬が薩摩藩士ではなく宇和島藩士であること、筆跡から見て上月の自筆であること、その孫の朝太郎が鹿児島新聞の記者となり、絵巻を鹿児島にもたらし、大正4年(1915)に新納榮によって転写されたことなど、作者に関して、あるいは絵巻の伝来の全容についてかつて考証を試みた<sup>(1)</sup>。前稿[丹羽2017]を踏まえ、本稿では、作者が宇和島藩士であることを前提とし、絵引の対象資料である当該絵巻の成立・伝来について時間軸に沿って解説を行っていきたい。前稿発表以来2年余りが経過したが、多少の修正を行う必要があるものの当該絵巻の成立についての新たな知見が得られたわけではない。前稿と重複する部分が多くなるが、前稿では紙幅の都合で割愛せざるを得なかった部分を補足し解説するとともに若干の訂正を行いたい。

### 2. 宇和島藩上月家

宇和島在住の上月晶<sup>しょう</sup>氏所蔵の文書(以下、「上月家文書」)および宇和島藩の記録類によって上月家について少し詳しく述べる。

上月家には、判物<sup>(2)</sup>【図1】、系図や由緒書の下書き、控え等が複数伝来している。宇和島藩では江戸時代を通じ、しばしば藩士に由緒書の提出を命じているが、これに対応するため当主がしたためたものが伝わっていると推定される。以下、上月家文書所蔵の由緒書とそれに類する記録、および系図を列記



【図1】伊達宗城の朱印が捺された判物。弘化2年(1845)8月13日付上月新五兵衛(行敬)宛(上月家文書)

する。なお、記号は私に付したものである。また、これらの資料を基に上月家略系図を作成した【図2】。代数は宇和島伊達家に仕え始めてからの代数を表したものと推定される(J)〔系図3〕の記述に従っている。

(A)〔由緒書<sup>(3)</sup>〕

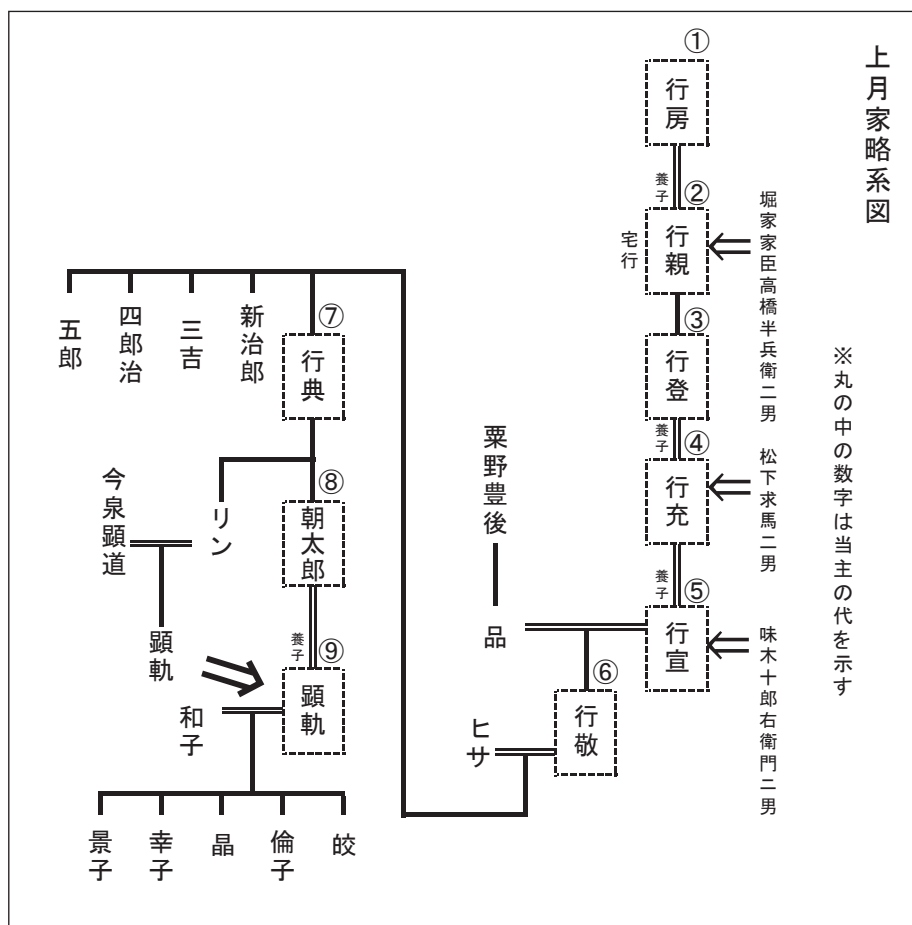
「元禄<sup>(ママ)</sup>八亥年」の年記を奥に記す。

(B)〔由緒書<sup>(4)</sup>〕

「享保六年辛丑年十月」に差し出された由緒書で、宛先は「鈴木次太夫殿／梶田又兵衛殿」。

(C)〔宝暦十四年 由緒書〕

奥書に「寶暦十四甲申／六月廿二日 上月新五兵衛(印)」とある由緒書。元禄十年の京都御留守居御免と江戸御城使見習拜命の前の項目の中ほどから前が欠ける。



【図2】上月家略系図

(D) 「奉願口上之覚」

上月行宣が藩（宛先は水間所左衛門、堀池宇太夫、高間八太夫）に差し出した隠居願の下書きと推定される。

(E) 「由緒書」

奥書「文化三年寅七月 上月新五兵衛」、宛先は「徳弘弘人殿」。

(F) 「由緒書」

奥書に「天保三年辰年従 弘化三年年迄十五ヶ年  
奉勤仕候」とあり、年代と筆跡から、上月行敬が弘  
化4年度の書き上げに際して藩に提出した由緒書  
の下書きないしは控えと推定される。

(G) 「由緒書」

仮綴の冊子。巻末に「弘化三年三月 上月新五兵衛」、その後「望月助兵衛殿／大和田主殿殿」と宛先を記す。

(H) [系図 1]

「村上源氏赤松氏之末裔」  
で始まり、行親の子「岩蔵」  
で終わる。

(I) 〔系図 2〕

前に欠損があり、当主としては上月菌左衛門行充から始まり、上月新五左衛門行敬とその子岩蔵で終わる。末尾に「天保四年癸巳六月写之」とあることから、上月行敬の筆写と推定される。

(J) 〔系図 3〕

上月新五兵衛行親を起点とし、八代目の朝太郎とその子（養子）の顕軌で終わる。朝太郎が筆記したものとは推定される。

(K) 〔上月家代々当主夫妻  
覚〕

「上月四郎左衛門源行猶／  
同妻」から始まる、上月家

代々当主とその妻の記録。「上月新五兵衛源行敬／同妻 ヒサ女」まで同筆。最後の「上月小平太行典」と「同妻セイ女」のみ別筆で没年月日と享年を記す。

まず系図からみてみよう。(H)は、上月因幡守から始まり、その子上月豊後守について次のような記述がある。

世々播州佐用郡上月之城主也、信長公命羽柴筑前守秀吉被攻三本城主別前小三郎秀治之時、上月之城堅固而難落、秀吉入和、可為一城之主之旨約之、因茲、開城令降參之處、即被預福崙左衛門太夫正則了、……

この後、いわゆる本能寺の変が起こり、豊後守の子、分右衛門が福島正臣に仕え、一万石を領したという。(H)では続いて、上月右京亮—上月四郎兵衛秀忠—上月四郎左衛門行猶—……と続く。右京亮



と秀忠はいずれも三草城主で、秀忠は別前が秀吉によって滅された時に没落したとする。

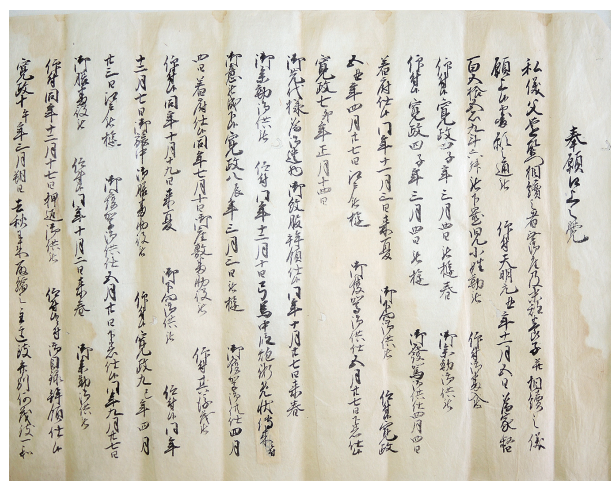
行猶は9歳で甲斐国の加藤左近太夫貞泰に近侍、15歳で家老職、その後浪人して寛文12年(1672)1月12日、京都で病没した(法名、慶安)。

行猶の子が素跡で、若い時に「目疾」により中江與右衛門の門に入り儒学を学ぶ。播州宍粟郡主松平備後守に浪人分で国政を談じ、延宝4年(1676)2月8日大坂天満にて病死。

素跡の子が、(J)でいうところの上月家初代新五兵衛行房で、9歳で松平備後守恒元に見小姓として出仕、その後浪人、宇和島伊達遠江守宗利に勤仕し京都留守居、宗賛の時代には江戸留守居を務め、高二百石。享保5年(1720)隠居(隠居名、生計)。享保6年(1721)没、享年68。(A)〔由緒書〕によると「梶田又兵衛縁者之由緒を以、御當家江被召出、貞享三丙寅年六月朔日於宇和嶋 宗利様江始而 御目見仕、虎之間御奉公」とあり、貞享3年(1686)6月1日に、宇和島で三代藩主伊達宗利にお目見えし、伊達家に奉公を始めたことがわかる。

(C)〔宝暦十四年 由緒書〕は、上月行房(初代)から行登(三代)にかかる事蹟を記している。行房は、京都留守居を務めた後、元禄10年(1697)江戸で御城使見習、翌年には加増百石、都合二百石となる。以来、享保5年(1720)隠居するまで江戸に滞在して種々の内外の勤めを果たした。例えば、元禄12年(1699)の伊予国国絵図御用、御城使兼辻番支配、増上寺火の番先乗り、宝永元年(1704)の聖堂御手伝棟上げの節の警固役、同3年(1706)の増上寺火の番、同7年(1710)の山王火の番などである。

二代の行親(宅行)は、生国は越後で村松の堀左京亮に仕えていた高橋氏の出身。正徳3年(1713)行親の養子となった。同4年(1714)小姓勤め、享保5年(1720)家督相続、藩主初入部に御供し、享保9年(1724)在所(宇和島)への引越、同14年(1729)御目付役、同19年(1734)鉄砲組預、物頭役、寛保3年(1743)長柄組預、翌4



【図3】上月行宣「奉願口上之覚」(上月家文書)

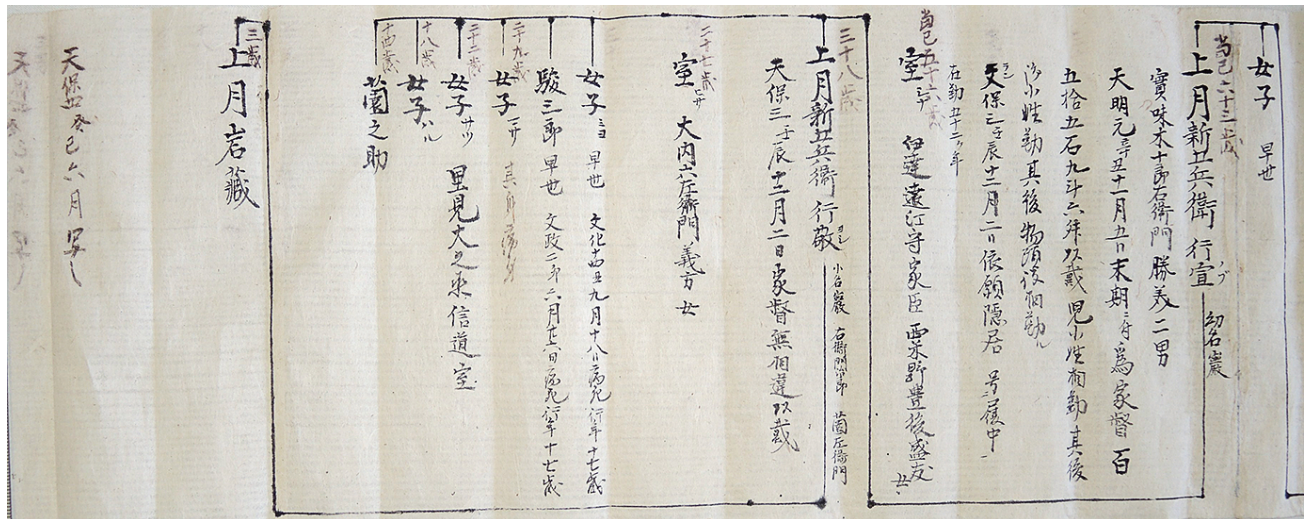
年病気のため息子の番代を願い出る。

三代の行登は、父の番代を認められ、虎の間出仕、宝暦2年(1752)11月家督相続した。宝暦7年(1757)より御広敷番頭、同11年(1761)山門御普請御手伝御用掛を務める。

四代行充は、伊予吉田藩士松下求馬の二男で安永8年(1779)2月に家督を相続。天明元年(1781)長柄頭となるが、同年8月、31歳の若さで病死する((J)〔系図3〕による)。

五行宣(行敬の父)の事蹟は、「由緒書」のほか、(D)「奉願口上之覚」【図3】に詳しく書かれている。行登には相続する者がいなかったため、末期養子が認められ、天明元年(1781)11月5日に行宣が家督相続し、見小姓として出仕した。行宣は(I)〔系図2〕【図4】にもあるように「味木十郎右衛門勝美二男」で、明和8年(1771)生まれ。家督相続は11歳の時である。一方、上月家文書中の判物で分かるように、末期養子のため、石高を67石減ぜられている。藩主の御供で江戸に上ること数度、寛政12年(1800)に病気のため表方の勤務に変わり、長柄頭、兵具方、鉄砲頭を歴任、文政9年(1826)2月には稲富流砲術世話を命じられている。

五行<sup>ゆきよし</sup>敬は、寛政8年(1796)6月4日誕生、その事蹟を系図から抜き出してみよう(「」は朱書を示す)。



【図4】(1)〔系図2〕上月行敬とその親・弟妹・子の記載部分（上月家文書）

(I) 〔系図2〕

「当巳六十三歳」

上月新五兵衛<sup>ノブ</sup>行宣 幼名巖  
實味木十郎右衛門勝美二男  
天明元辛丑十一月五日末期ニ付爲家督百  
五拾五石九斗六外頂戴児小姓相勤其後  
御小姓勤其後物頭役相勤ル  
天保三壬辰十二月二日依願隱居 号<sub>テン</sub>履中  
在勤五十二ヶ年

「当巳五十六歳」

室 シナ<sup>(6)</sup> 伊達遠江守家臣 栗野豊後盛友女  
「三十八歳」  
上月新五兵衛<sup>ヨシ</sup>行敬 小名巖 右衛門治郎 蘭  
左衛門  
天保三壬辰十二月二日家督無相違頂戴

「二十七歳」

室 ヒサ 大内六左衛門義方女  
(妹弟の項目を中略)

「三歳」

上月岩藏  
天保四癸巳六月写之

(J) 〔系図3〕

上月新五兵衛行敬 小名巖 虎治 右衛門治郎  
其後蘭左衛門

天保三壬辰十二月二日家督相續  
嘉永六年癸丑正月十二日御長柄頭  
安政四丁巳五月廿七日御取次役  
安政六己未七月七日依願隱居  
名園夫  
萬延二年辛酉正月十七日病死行年  
六拾六歳  
梅岳院實譽檀園居士

行敬は文化元年（1804）2月、藩主村壽に御目見え、文政8年（1825）3月、大内六左衛門末娘と婚約を届け出、妻（ヒサ）は天保2年（1831）11月上月家に引き移る。天保3年（1832）家督相続、新五兵衛と改名する。天保10年（1839）から翌年にかけて江戸で御広敷番頭を務めている。

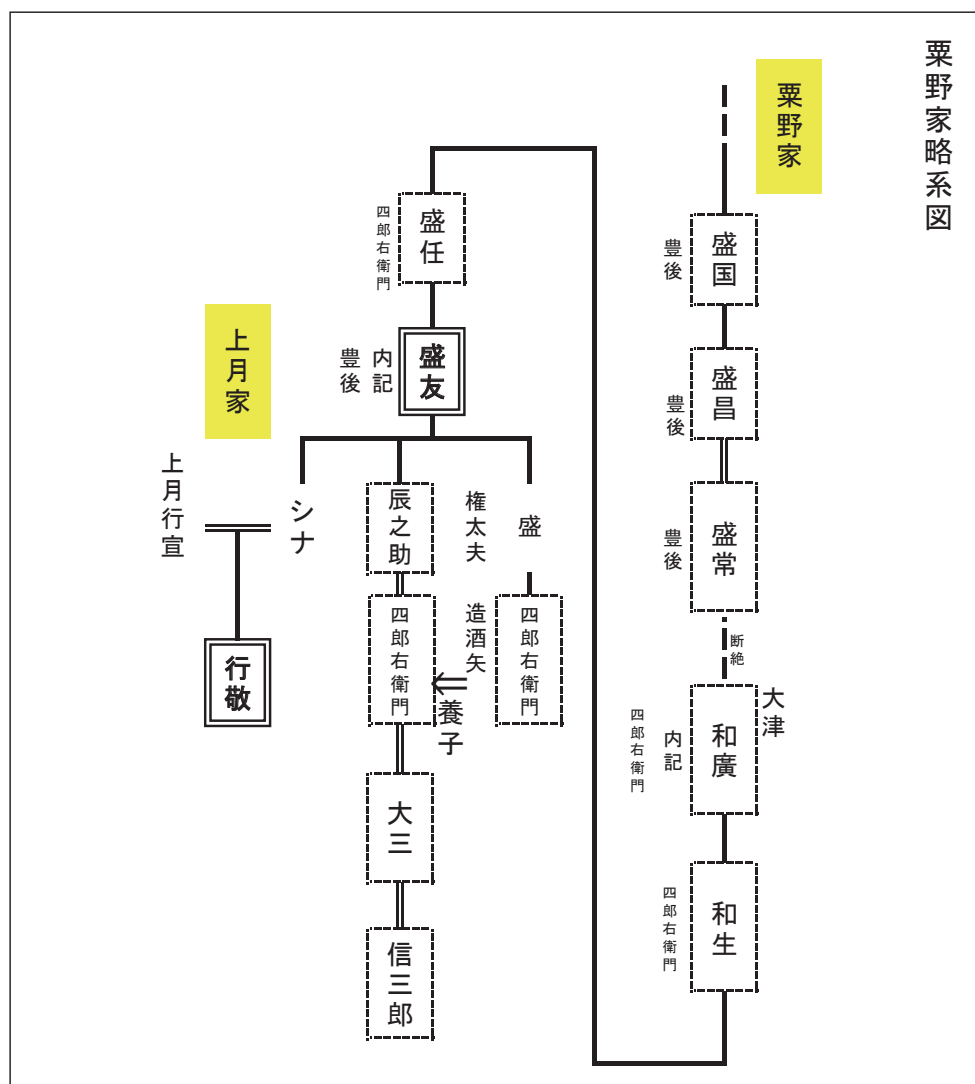
琉球人の絵巻を描いた時期、すなわち嘉永前後の行敬の事蹟について由緒書に見える情報は決して多くはない。稿本の状態にとどまっていたためかと思われるが、以下にそれを引用する〔近代史文庫宇和島研究会1980〕。

弘化四未年

九月二日

一 稲富流炮術指南方無之二付、相門中取立世話いたし候様被 仰付事、  
嘉永二酉年

二月十二日  
 一 次男寛、大内素平  
 聲養子願済候事、  
 九月廿九日  
 一 右ニ付、明晦日為  
 引越申旨届之事、  
 十一月四日  
 一 譜代喜和之丞与申  
 者、江戸表江罷越度  
 旨申出、明日乗船為  
 致候処、御関所手形  
 御下被成下度願承届  
 候事、  
 十二月廿二日  
 一 悴岩蔵、来年頭分  
 主斗と革名願済之事、  
 嘉永五子年  
 二月廿二日  
 一 御城番役被 仰  
 付、御兵具方、御腰  
 物方兼帯被 仰付事、  
 同六丑年  
 四月十二日  
 一 御長柄頭被 仰  
 付、勤方前鉢入之儀ハ神尾近江殿ニ被 仰付  
 事、



【図 5】 栗野家略系図

なことは残念ながら本資料から明らかにならない。

### 3. 上月行敬と外祖父栗野豊後

上月行敬は絵巻の製作意図を跋文の中で「浅草御蔵の火の番の役を主君が仰せつかった際、外祖父の栗野盛友はその責任者を担当したが、天性の画才を発揮して幼稚の者に知らせるため火防守備隊行の様子2巻の絵巻にした。これを見た自分（行敬）は、初めて江戸の藩邸や隊伍の様子を知ることができた。今、祖父にならって「刃土の幼稚（こども）」に江戸の様子を知らせるために筆をふるった」としている。

栗野家について由緒書を見てみよう。  
 「明暦元年由緒書<sup>(7)</sup>」には、

嘉永2年（1849）11月、家来「喜和之丞」なる者が江戸行きを希望し関所手形を申し受けたとの内容があるが、行敬が江戸行きを命じられたことを直接示す文言は見当たらない。この「喜和之丞」の記載が、行敬の江戸行きを示すものとすれば、それは藩主伊達宗城の参勤の御供としてではないことになる。ちなみに宗城は前年の嘉永元年春に参府し、大坂で逃亡中の高野長英を引見している[宇神2011]。嘉永5年（1852）、行敬は御城番を拝命しているが、これは宇和島での役職であろう。つまり、行敬の江戸行きの時期や目的については具体的



一 私生国仙臺。大殿様御部屋栖之時分、慶長拾六年亥正月の御小姓奉公罷出、……（中略）……元和七年八月一日、大津右近名代貳百石之品被下置候、寛永五年六月十日ニ五拾石、同七年二月十五日ニ五拾石、御加増被下置、都合三百石拝知仕候。私御奉公之年数者四拾七年申上候、以上

とあり、「享保六年 家中由緒書」<sup>(8)</sup>にも「先祖栗野大膳亮二男豊後、秀宗公御守役相勤、御知行五百石被下置、從仙臺御供仕罷越候」とあるように、初代宇和島藩主伊達秀宗の守役を務めた家柄であり、明暦の時点では三百石、嘉永3年の『分限帳』では二百四十五石六斗を拝領していた。

豊後盛友の娘が上月行敬の母であるが、由緒書には、「寛政四子閏三月六日、末女上月巖妻ニ縁約願濟事」とある。上月家の側の資料では新五兵衛行宣の妻として、(I)〔系図2〕では「室 シナ 伊達遠江守家臣 栗野豊後盛友女」、(J)〔系図3〕では、「妻 品 栗野豊後盛友女／天保十一庚子十月八日病死／行年六拾三歳／浄邦院善譽智粹大姉」とある。これらを総合すると、行敬の母は、栗野豊後盛友の末娘で、名は品（シナ）、安永7年（1778）に生まれ、寛政4年閏3月に上月巖（新五兵衛行宣）と結婚（時に15歳）。行敬が天保4年（1833）当時38歳、シナが56歳であることを考えると、シナは長男行敬を寛政8年（1796）に19歳で産んだことになる。

さて、栗野盛友であるが、「明和由緒書」<sup>(9)</sup>によると、

宝暦五年六月十六日 初御目見え。

宝暦七年六月二十七日 父四郎右衛門盛任、病死。

同年八月二十二日 末期相続が認められ、家督相続（二百石）。

宝暦十一年七月二十二日 山門（比叡山）御手伝普請掛拝命。

宝暦十二年四月五日 江州坂本御小屋場へ到着。十月十九日帰国。

明和元年六月朔日 江戸へ御供（翌年、帰国）。明和初年から明和八年までの履歴は不明ながら、「自明和至文政 由緒書」<sup>(10)</sup>によると、

明和八年 目付役兼御軍使。

安永二年六月十二日 江戸詰を命じられる。

安永八年正月二十二日 留守詰を命じられる。

天明元年閏五月二十六日 悴造酒矢、御前にて元服し名を盛と改む。

同 年七月二十二日 新席仰せつけられ、名を豊後と改む。

寛政三年九月二十二日 旗奉行拝命。

寛政九年七月十六日 悴権太夫病死、堀池左太夫家に贅養子に入っていた次男辰之助を呼び戻す。

文化三年二月二十七日 御用人格を命じられる。

文化四年六月二十二日 権太夫の子造酒矢を庄右衛門（辰之助改）の相続嫡子とすることが認められる。

同 年十一月二日 隠居が認められ、庄右衛門が小姓勤を命じられる。

文化七年七月二十七日 病没。

豊後は文化4年（1807）の隠居の際に70歳を超えていた。明和元年（1764）初めて江戸に参勤の御供をして以来、隠居までの間に、藩主が幕府より「浅草御蔵火之番」を拝命したのは次の6回である。<sup>(11)</sup>

安永元年（1772）

安永9年（1780）

天明6年（1786）

寛政元年（1789）※後に増上寺火之番に変更

寛政6年（1794）※後に増上寺火之番に変更

文化2年（1805）

寛政期までは五代藩主伊達村候の治政におけるものに加え、次の宗紀の時代、上月行宣（行敬の父）も文化2年3月に藩主村壽の御供で江戸に出た後、同じ役を務めている。上月家文書の（D）上月行宣の「奉願口上之覚」に、「同月（文化3年4月一引用者注）廿四日此度浅草御蔵火之御番被為蒙仰候ニ付出役被仰付候」とあるのがそれである。行



宣は「水見役」を無事に務めあげ、翌年4月に役を他藩に譲り、その直後藩主の下国に従行列の宿割と関札の役を務めた。栗野盛友は江戸詰（藩主が在国時「留守詰」）を長くしているとも考えられるので、隠居までの間、上記の他に1～2回は「浅草御蔵火之番」を務めた可能性もありえよう。前稿でも指摘したが、安永元年は盛友が江戸に出る前なのでこれを除き、安永8年（1779）に「留守詰」を命じられ、翌9年の5月に村候が火之番を拝命したこの年が最も可能性が高いであろう。栗野盛友の「火防守備隊行の趣」を描く絵巻の現物の出現が期待されるところだが、この絵巻が『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋賑之図』を生みだした基であった。

前稿でも指摘したが、行敬最晩年（万延元年12月）作成の「祭文」の文面からは、主君と先祖への感謝の念を忘れない律儀な武士の姿が髣髴とする。その一部を引用しておく。

…（前略）…当時の辛<sup>から</sup>き世の中ニ家内安樂ニ暮し毎日家内朝暮の對面、誠に目出たく暮す事、是全く 君の御恵ミニ而、先祖々大祿頂戴<sup>てうだい</sup>の御蔭也。有かたき事ニあらずや。将亦父人ハ他々當家御相続の事なれば、我身分ニとつてハ猶更上月家の御恩身ニ余り難有存る也。何卒右の御礼申上度、豺獭<sup>サイダツ</sup>すら本ニ報ゆるの禮をなすと聞ば、責て年に亅度なりと時節のものを以魚類取交へ、膳を調へ先祖へ薦<sup>すす</sup>し之、祭の禮をなし度、尤毎歳盆に先祖を祭るといへとも、家の掟ニ而毎年定りたる献立ニ而龜末なる供物なれば、別に日を撰び祭り度存立祭文を書す。

絵巻を作成した嘉永4年（1851）は、行敬56歳。その8年後、行敬は長男の行典に家督を譲る。

行敬は「予亦邊土の幼稚<sup>またへんど こども</sup>ニ粗都會<sup>ほぼとくわい</sup>（えと）の形状<sup>きやうじやう</sup>（ありさま）をもしらしめんと」絵巻を描いたというが、「幼稚」（こども）とは誰を想定していたのだろうか。行敬は（J）〔系図3〕によると、妻大内氏との間に5人の男子を儲けた。長男行典は後述するが、二男新治郎は嘉永2年（1849）に大内



【図6】新納榮（新納桂氏提供）

素平の婿養子となることを藩へ願い出、同5年（1852）3月に婚姻が整っている。これは行敬が江戸から戻ってからのことであろう。三男三吉は天保8年（1837）に2歳で味木半兵衛へ、四男四郎治は文久元年（1861）に20歳で二階堂理助へ、それぞれ養子に行っている。五男五郎祐も安政6年（1859）に巖と改名、明治25年（1892）に高光村の神職草石方へ入夫している。天保2年生まれの子長男行典は21歳、行敬は将来行典が勤番で江戸に滞在することを思い描いたのではないだろうか、以下次男19歳、三男16歳、四男10歳、五男9歳、その弟たちはまだ若年であった。この他、他家に嫁いだ、あるいは養子に入った妹がいたから、その子供たちも想定していたであろう。両親の実家である味木家と栗野家の子弟（行敬の従兄弟たちやその子）もその内に含めてよいかもしれない。栗野家と上月家は宇和島城の麓のそれぞれ西と東に位置し近い距離にあった（本書Ⅳ-12、愛媛県歴史文化博物館）

館蔵「宇和島城下地図」参照)。

『行粧之図』の序文にある「帰思の旅鬱を慰」めるために筆を執ったとの記述も家族や一族の安寧と永続への「祈り」の現れに他ならない。

#### 4. 新納榮描く——鹿児島県立図書館本——

鹿児島県立図書館所蔵の「琉球人行粧序」「琉球人行粧」「琉球人往来筋脈之図」という3巻の絵図は、大正4年(1915)9月から11月にかけて新納榮によって写されたものである。それぞれの巻末には、

「大正四年九月十一日 新納榮写／當年九才」

「大正四年九月／九才児 新納 榮／写」

「大正四年十一月 九才 新納 榮 写」

と奥書があり、各巻の書写の時期と、新納榮が当時9歳であったことが記されている。また、受入印から、この絵巻が「大正四年十一月九日」に「購求」されたことが分かる。

全国滋賀県人会連合会発行の『全滋連』38号(2011年2月)に記載された「経歴」を基に、新納の履歴をたどってみよう。

##### 【経歴】

明治40年(1907) 鹿児島市に生まれる

昭和4年(1929) 東京美術学校(現東京藝術大学)日本画科卒業

卒業制作同校にて買上げ永久保存

昭和5年(1930) 帝国美術院第11回展覧会に入選

昭和8年(1933) 滋賀県立日野高等女学校(美術・書道)

昭和16年(1941) 横浜フェリス女学院(美術・書道)

昭和20年(1945) 滋賀県立日野高等学校(美術・書道)

昭和39年(1964) 同校退任

昭和43年(1968) 東京攻玉社学園(美術)  
以降 東京日本画院展覧会にて度々入選

平成7年(1995) 滋賀県日野町わたむきホール  
虹にて個展製作中の作品を仕上げるため健康回復を祈念するも、一部未完成で遺作展となる。  
(同遺作「牡丹」は日野高等学校に寄贈) 茨城県牛久市にて死去

榮は東京美術学校日本画科を卒業後、滋賀県立日野高等女学校の美術と書道の教諭となり、一時、横浜フェリス女学院へ転じるが、空襲が激しくなり疎開が行われると再び日野にもどり、高等学校を拠点として日本画を描き続けた。<sup>(12)</sup>

新納榮の長男新納桂氏の許に、榮が兄新納時守からもらったという系図の写しが残る。これによると、榮は新納時哉の<sup>(13)</sup>三男として明治40年(1907)3月5日、鹿児島市新照院町で生まれた。新照院町は鹿児島市の中央に横たわる城山の南西麓に位置する。ここには榮の母の実家児玉家があった。当時の習慣として出産は実家に帰って行くことが多かったため、榮も母親の実家で生まれたのであろう。後述するように当時屋久島の開墾事業を行っていた父は不在がちであったと推定され、母の実家かその付近で幼少期を過ごすことになったと思われる。絵巻を写したのは榮が満8歳と6ヶ月～8ヶ月の時期ということになる。奥書にあった「九才」というのは数え年であったわけである。

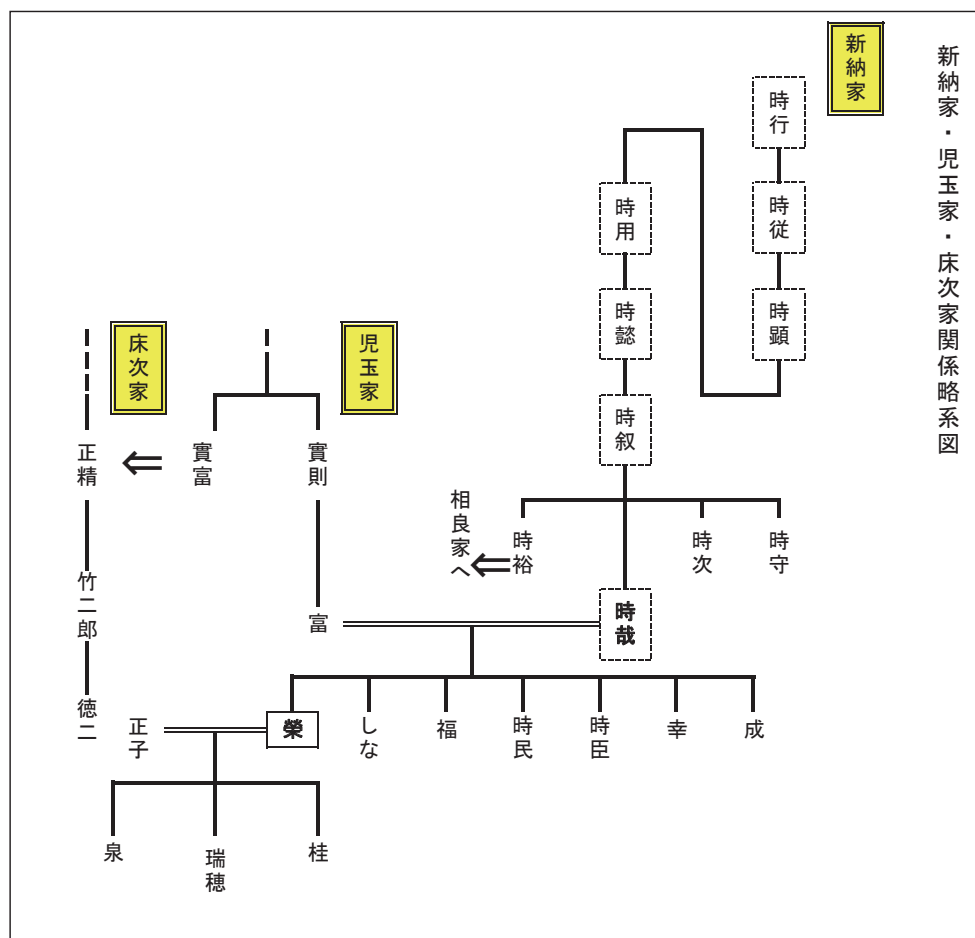
榮が上月行敬の琉球人絵巻を写すことになったきっかけや背景をさぐるために、改めて新納榮の父母や教育的環境、および上月家との接点について記しておこう。

榮の父時哉は、元治元年(1864)6月11日生まれで初名宗助、家は鹿児島城下池之上町二十二番戸(現在の鹿児島市池之上町九番地、稲荷川に面する土地)にあり、『旧薩藩御城下絵図』(鹿児島県立図書館蔵)では「新納休藏／貳百壺坪」とある所である。休藏とは榮の祖父に当たる時<sup>ときつら</sup>叙である。兄の時守が家督相続し、時哉は明治4年(1871)2月15日に新納九兵衛の跡を相続、同23年4月に兄玉宗之丞實則の三女、富と結婚する。富はすなわち新納

榮の母親である。以下に時哉の履歴を年表風に書き出してみる（[丹羽2017]に基づき、新たに判明した事実（\*）を加えた）。

元治元年（1864）  
誕生（享年を数え年として逆算）  
（年次不明） 鹿児島師範学校卒業。  
明治23年（1890）  
4月 児玉宗之丞 實則三女の富と結婚。  
同年5月6日 沖縄県師範学校勤務のため富とともに鹿児島を出発。

明治26年（1893）  
尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校 図画科の教員免許状取得。  
明治28年（1895） 初代鹿児島師範学校長、黒田才蔵の『追悼冊子』に和歌二首「あたしの、草の葉末におく露の消えて跡なき人の命か」「もゝとせの命も露ときえすてゝ残るは人の名のみなりけり」（沖縄県 新納時哉）と義捐金壹円を寄せる。（\*）  
明治31年（1898）11月 『多級複式教授法』（小那覇朝親発行）を出版。肩書は「沖縄県師範学校訓導兼助教諭」  
明治33年（1900）8月5日 時哉の母死去。（\*）  
明治35年（1902） 鹿児島県熊毛郡視学。  
清国直隸師範学堂に教習として招かれ、図画と博物を教授する。  
明治39年（1906） 清国保定師範学堂へ赴任。



【図7】新納家・児玉家・床次家関係略系図

明治40年（1907）3月5日 三男榮、鹿児島市新照院町で生まれる。  
大正6年（1917）2月 『神州根本教育 理想統一訓』（教育統一会刊）を「新納榮山」の名で刊行。<sup>(14)</sup>  
大正13年（1924）8月 奏任官待遇（少年保護士事務局嘱託）となる。  
昭和3年（1928）1月2日 病気を理由に辞職を願い出る。  
同年3月1日 従七位に叙される。  
同年8月8日 鹿児島県熊毛郡下屋久村中橋瀬で死去。65歳。

一方、母親の実家児玉家は江戸時代、深見玄岱に師事した児玉金鱗（宗因）、室鳩巢に師事した児玉図南といった学者を輩出した家であった。榮の祖父（富の父）宗之丞は鹿児島郡役所の書記を務める。



時哉が富を結婚相手に選んだ理由などは不明だが、『兄玉宗之丞日記』に見えるように、宗之丞がわざわざ聞き合わせに赴いているところからすると両家が親戚関係にあったとは考えにくいので、新納家が右のような兄玉家の性格や家格を考慮して結婚を申し込んだものと推測する。

沖縄県師範学校時代の明治26年に時哉は「文部大臣ヨリノ免許状相達」(国立公文書館「任免裁可書」)したが、免許の科目は「図画」であった。その後、時哉は雑誌『琉球教育』にさかんに教育に関する論考を発表しているが、ほとんどが教授法に関するものであり、これらはまとめて『多級複式教授法』として刊行された。一時、熊毛郡視学として屋久島に渡ったが、明治35年、当時清国が中国人では教授できない「西学」(理科、法政、図画、体育、音楽など)を、日本人を招聘して担当させており、時哉も招きに応じて袁世凱が建てた直隸省師範学堂で図画と博物を教授した<sup>(15)</sup>。

時哉の帰国の時期については不明ながら、大正2



【図8】上月行典(上月家文書)

年(1913)までには屋久島平野村字中橋瀬上・同村字中橋瀬で、官有地の払い下げを受けて開墾に従事していたことが知られる<sup>(16)</sup>。『屋久町郷土誌』[屋久町郷土誌編さん委員会1995]によれば、静岡県から茶業の経験のある農民の移住勧誘方を県庁に願い出ているという。熊毛郡視学時代に官有地の払い下げおよび開墾を思い立ったものだろうか、一見教職とは別の道を模索し実行に移している。そして屋久島の開墾地が時哉の終の棲み家となったようである<sup>(17)</sup>。

榮が『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』を模写した時期と時哉が社会事業に関わっていた時期が重なっている。父親が鹿児島にいたかどうかは重要な点であるが、屋久島と鹿児島との間を行き来していたのが実状だったのではなかろうか。気になるのは、このような開墾事業や特産物の栽培など殖産興業の事業への関心は、後述するように同世代であり士族という点で上月朝太郎にも通じるものであったということである。

時哉はその後、大正6年に東京市下谷区茅町に住んでおり、同7年には赤坂区に転居、晩年の少年保護士事務局嘱託を辞職する願<sup>(18)</sup>にも赤坂区の同所が記載されていることから、その後はずっと東京に拠点を置いていたことは明らかである。榮も絵巻を写して間もなく家族で東京に引っ越していったものと思われる。

次に榮の母親の実家、兄玉家について触れておく。先にも述べたように、兄玉家は学者の家柄であるが、富の父、宗之丞の弟実富は同じ新照院の床次家に養子に入っている。この実富は、薩摩藩の絵師能勢一清に狩野派の絵を学び、官吏としての公務の傍ら洋画を研究、アメリカのグラント將軍の肖像や西郷隆盛の肖像を描いたことでも知られる床次正精<sup>とこなみまさよし</sup><sup>(19)</sup>(1842-1897)である。榮が育った新照院町は、東の城山と、西隣の草牟田との間の山、および南の甲突川で区切られた三角形をした区域<sup>(20)</sup>で、城山の麓には大徳寺、草牟田との間の山の麓には上山寺があり、その間に城下士の屋敷が集まっていた。安政6



年（1859）頃の作成とされる『旧薩藩御城下絵図』（鹿児島県立図書館蔵）では80軒ほどの屋敷地がある。床次正精が師事した能勢一清（1790-1854、通称、武右衛門）は、木村探元の高弟能勢探龍の曾孫に当たり、兄玉宗之丞の屋敷のすぐ向かいに住居があったし、一清の子で内山家に養子に入った内山一観（1823-1897）の家も指呼の間にあった。地域の先輩が後輩を指導、教育する鹿児島独特の郷中教育と呼ばれる制度があるが、新照院では芸術、特に絵画を学ぶ伝統が育まれたといつてよいほど芸術家（画家）が輩出している。榮が生まれたのは大叔父の床次正精の没後であったが、絵画を学ぶ才能と十分な環境の中に生まれてきたといえよう。

正精の長男は、通信大臣、鉄道大臣、内務大臣などを歴任した政友会の代議士床次竹二郎であり、竹二郎の子が参議院議員を務めた徳二である。時哉と竹二郎もほぼ同年輩であり、交流があったと思われる。ちなみに、新納家と床次家は、徳二の時代にも交流があり、結婚式にも招待しあう関係であった。

## 5. 上月朝太郎

次に上月行敬の描いた琉球人の絵巻が鹿児島に伝来した理由について述べる。

行敬の長男である行典は幼名岩蔵、通称、主計、蘭左衛門、小平太。上月家文書には、(J)〔系図3〕の情報のほか、袴姿で写された写真【図8】、晩年鹿児島報徳会からの長寿者表彰状などの資料が伝わる。しかし、行典が上月家をどのように切り盛りしたのか、また明治をどのように生きたのかといったことは定かに分らない。

行典については簡単な経歴のみ記しておく。

天保2年（1831）11月18日生<sup>(21)</sup>

弘化3年（1846）11月 前髪を取る

安政6年（1859）7月7日 家督相続

万延元年（1860）6月 伊達宗徳の御供で江戸へ  
（以後、たびたび旅勤め）

明治維新後 禄二十石

明治7年（1874）家禄奉還

明治29年（1896）隠居

大正11年（1922）3月31日 没（享年94）。

行典の長男朝太郎が絵巻を鹿児島にもたらしたと目される人物である。朝太郎は明治元年2月23日生、同29年3月31日に家名相続、昭和14年10月5日に没している。『農業雑誌』第461号（明治25年10月、学農社）に「南豫牧牛會社の創設」と題する記事を発表しており、その中で「身直接に其會社（南豫牧牛會社—引用者）に従事するを以て」と書き、また、自身の住所を「伊豫国南宇和郡一本松村」（現在の愛南町）としている。つまり、明治25年（1892）段階では宇和島で牧畜業に従事していたことになる。朝太郎は愛媛県歴史文化博物館所蔵の「井谷家写真帖」所収の「北宇和郡會議員集合写真」（写真番号19、明治34年10月15日）に写っており、周囲の書き込みに「（書記）（新聞記者）上月朝太郎」とあるという<sup>(22)</sup>。一方、日露戦争期（明治37～38年）には『海南新聞』にいたという田中七三郎（蛙堂）の証言もある〔愛媛新聞百二十年史編纂委員会1996〕。明治30年代の半ばには愛媛県内で新聞記者として働いていたことは確実である。

その後、朝太郎は鹿児島新聞社に就職する。鹿児島新聞社では、明治30年から「賀状に代ゆ」として毎年元旦に社員の氏名を掲載しているが、明治42年（1909）に初めて朝太郎の名が現れる。上月朝太郎は現在も鹿児島で作り続けられている「薩摩狂句」を発案した記者の一人である〔南日本新聞社1981〕。雅号は月の別名である「玉兔」、自己の姓にちなんだ号である。初めて募集を行ったのが明治41年6月4日ということである。したがって、朝太郎は明治41年中に鹿児島に赴任していたことになるだろう。同社には宇和島出身で同新聞の基礎を固めたと評される元吉秀三郎がいたが〔南日本新聞社1981〕、朝太郎の鹿児島新聞社入社はあるいは同郷の元吉の誘いによるものかもしれない。さらに、



【図9】『大正三年櫻島大爆震記』の編者たち。後列右から二人目が上月朝太郎（朗山）

朝太郎は大正3年1月の桜島大噴火の際、鹿児島新聞記者<sup>(23)</sup>13名が共同で編纂した『大正三年櫻島大爆震記』の作成にも参加している【図9】。記事を書く際の雅名（ペンネーム）「上月朗山」を用いていた。

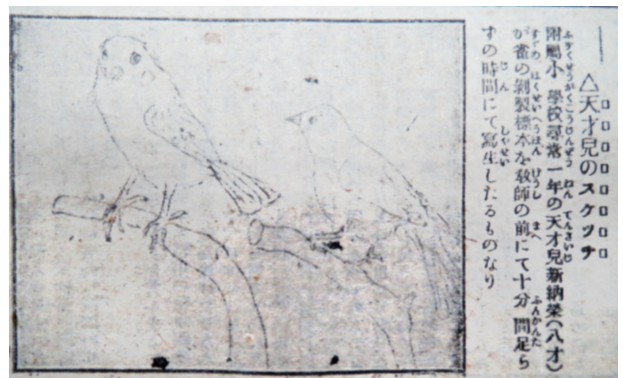
鹿児島新聞社の社員一同が名を連ねる新年の広告には、大正9年から11年までの3年間は「川内支局」の肩書きが付いている。最後に名前が見えるのは大正15年（1926）であり、昭和2年（1927）までには退社したと思われる。上月家の住居は、鹿児島市内の「平之町七十」であつた<sup>(24)</sup>。

上月<sup>あきのり</sup>顕軌は、系図でも明らかなように、朝太郎の妹リンと今泉顕道の子（次男）で、明治31年（1898）に北宇和郡畑切村字左新田で出生、同年10月伯父朝太郎のところに養子に入り、同33年（1900）8月養子届が出された。顕軌は養父とともに鹿児島に来たものと思われ、大正5年（1916）3月には鹿児島県立第一鹿児島中学校（鹿児島県立鶴丸高等学校の前身）を卒業し、その後外務書記官として外地勤務、昭和22年（1947）7月7日没。

顕軌と結婚したのは鹿児島出身の樋口和子で、その妹八重子は医師の新納氏に嫁したという<sup>(25)</sup>。

## 6. 上月家と新納榮

明治の末期ごろから、かつて政治色が強く、硬質の漢文訓読調の文体で書かれていた新聞は次第に和文体に変化、大衆受けする娯楽的な読み物が掲載されるなど紙面に変化が見られるようになってくる。上月朝太郎が勤める鹿児島新聞社でも同様の変化が見られた。また、小中学生の作文、図画、習字の懸



【図10】『鹿児島新聞』（大正2年6月6日4面）に載る新納榮の記事（鹿児島県立図書館蔵）



賞の募集も盛んに行われるようになる。大正4年の大正天皇の即位式にあたってはより祝賀ムードが前面に出されて一層大衆化に拍車がかかる。

そのような流れのなか、大正2年(1913)6月6日の鹿児島新聞(4面)に、

#### △天才児のスケッチ

附属小学校尋常一年の天才児新納榮(八才)

が雀の剥製標本を教師の前にて十分間足らず

の時間にて寫生したものなり

として、枝に止まった二羽の鳥(雀)のスケッチが掲載された【図10】。「八才」とあるが例によって数え年である(満7才3ヶ月)。取材をした記者の名がないのは残念であるが、上月朝太郎の可能性もあるだろう。仮に別の記者であったとしても、当時の新聞社は役員・従業員合わせて30名程度の小規模なものであるから、「天才少年」のことは編集部内で話題になったにちがいない。

これはあくまで推測であるが、朝太郎が新納榮の才能に気付き、自身の祖父(行敬)が筆を執った絵巻(「中山使聘禮之圖」)の写本を作ることを依頼、あるいは勧めたという可能性が考えられる。ただ、その間を取り持った人物は誰なのか、榮の父の時哉か、それとも別の人物かは不明である。

絵巻が県立図書館に筆写後すぐに所蔵されていることから、図書館の関係者が仲介に入ったことも十分考えてよい。たとえば、当時は県立図書館が発足してから間もない頃のこと、郷土史料の充実を期していた初代館長片山信太郎(?-1922)が関与した可能性を考えることもできよう。この時期の県立図書館蔵本のうち「写本」の多くは、図書館が筆耕を雇って写させ買い上げたものが多い([丹羽2018])。新納榮が小学生であることを考慮すると、アルバイトということは考えにくい。大正4年の大正天皇の即位に合わせ、図書館に所蔵するに相応しい郷土史料を、記念するに相応しい「天才少年」の手でこれを写させたものと考えることができるのではないだろうか。「購入印」にある「購求」の文字の意味は、この場合、製本を含めた製作にか

かる費用を図書館が出したという意味になろう。当時の「写本」の筆写の際は、写す対象である資料の所蔵者(当該絵巻でいえば上月朝太郎)を記録しないのが通例である(一方で、寄贈した人物や団体については本と帳簿に記録される)。

#### 7. 鹿児島大学附属図書館へ

鹿児島大学は昭和24年(1949)鹿児島市玉里町にあって戦災を免れた公爵玉里島津家の蔵書を購入、これは「玉里文庫」と名付けられた。現在、『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』は「玉里文庫番外の部」に登録されているが、番外の部に収められている書籍類は、貴重書のうち、由来などの不明のものを登録したもので、本来玉里島津家とは縁のない資料である。

同絵巻は卷子本2巻の形をとっているが、以前はばらばらの状態で保管されており、一時、工学部建築学科の元教授伊藤<sup>いとうこう</sup>行氏の許にあったことがあるといい、同氏の退官(昭和61年)後、平成元年(1989)に鹿児島市内荒田八幡近くの南天堂表具店に依頼して巻物2巻に仕立て<sup>(26)</sup>られた。

鹿児島大学に入った段階で、既に2巻分しかなかったのか、途中で1巻分が失われたのかは不明であるが、現在補修された卷子本を見ると、もともと虫損など損傷が激しかったことが見て取れる。いずれにせよ、鹿児島大学に本資料が入った経緯については依然として謎のままであり、失われた1巻分がどこからか出現することを祈るしかない。なお、卷子本に仕立てる段階で一部錯簡が生じたことは前稿丹羽[2017]で指摘したとおりである。

#### 8. 残された課題

上月行敬の描く「中山使聘禮之圖」について、作者および伝来についてはおおよそ前稿ならびに本稿で明らかにすることができたと考える。また、本書で描かれた対象について解明がなされている。ただ、依然として課題は残っている。それは大きく3つあるといえよう。

まず、前稿〔丹羽 2017〕で述べたように、上月がどのようにしてこの絵巻を描くことができたのか、粉本は何かといった疑問については残ったままである。加えて、上月が江戸に滞在した嘉永期は、まさに島津斉彬の早期の襲封をめぐる画策が伊達宗城、島津斉彬、老中阿部正弘らの間で行われていた時期である。実際、琉球使節を花道とする島津斉興の隠居の早期実現を画策していた彼らは頻繁に連絡をとりあっていた〔芳 1993〕。宇和島藩と薩摩藩とはいつにもまして近い関係にあったといえよう<sup>(27)</sup>。当時、上月が江戸でどのような役務に就いていたのか、どのような生活を送っていたのかも未解明のままである。ただ、一つだけ言えることは、当時江戸では来るべき外国船の来航に備え、武器や兵糧の備蓄、軍事訓練が盛んに行われるようになっていたこ

とで、古式とは言え兵法に通じている上月行敬の役割はぼんやりとはあるが想像できよう。一方、上月が市販されている琉球使節の印刷物からではなく、薩摩藩から、あるいは宇和島藩の内部から使節に関する情報を得られた可能性も否定はできない。こうした観点を含め、上月が素材としたものを追求することが必要であろう。

第二に、上月朝太郎が鹿児島にもたらしたと思われる絵巻であるが、新納榮に写す機会を与えたのが誰であるのかという点である。本稿で示したのは仮説にとどまっている。さらなる調査、検討が必要である。

第三に、鹿児島大学に絵巻が収蔵された経緯についてである。資料の伝来を記録することの難しさを問われているともいえる。今後の解明を期したい。

#### 【注】

- (1) 〔丹羽 2017〕。
- (2) 上月家文書にある判物を時代順に列記すると以下のようになる。
  - 元禄八年八月十三日 高百石宛行（宗昭〔黒印〕⇒上月新五兵衛）
  - 元禄十一年五月七日 加増百石、都合二百石宛行（宗昭〔黒印〕⇒上月新五兵衛）
  - 享保五年三月廿三日 養父新五兵衛隠居により家督高式百石宛行（邨昭〔黒印〕⇒上月兵蔵）
  - 享保六年十一月十六日 高式百石宛行（邨昭〔黒印〕⇒上月新五兵衛）
  - 寛保三年八月十三日 高式百石宛行（邨候〔朱印〕⇒上月新五兵衛）
  - 寶暦二年十一月七日 父新五兵衛家督相続、高式百石宛行（天兒屋帝苗裔□□伊達氏嫡流政恵〔朱印〕⇒上月蘭左衛門）
  - 宝暦九年六月十六日 高二百石之内百石、高直しに付、都合二百二拾二石八斗宛行（邨候〔朱印〕⇒上月蘭左衛門）
  - 安永八年二月十四日 父新五兵衛家督高式百貳拾貳石八斗充行（村候⇒上月蘭左衛門）
  - 天明元年十一月五日 父蘭左衛門遺跡高百五拾五石九斗六升充行（村候〔朱印〕⇒上月巖）
  - 寛政七年八月十日 高百五拾五石九斗六升宛行（邨壽〔朱印〕⇒上月新五左衛門）
  - 文政八年八月十日 高百五拾五石九斗六升宛行（宗紀〔朱印〕⇒上月新五左衛門）
  - 弘化二年八月十三日 高百五拾五石九斗六升充行（宗城〔朱印〕⇒上月新五左衛門）
  - 天保三年十二月三日 高百五拾五石九斗六升充行（宗城〔朱印〕⇒上月新五左衛門）
  - 安政六年七月七日 父新五兵衛隠居、高百五拾五石九斗六升宛行（宗徳〔朱印〕⇒上月蘭左衛門）
  - 安政六年十月朔日 高百五拾五石九斗六升充行（宗徳〔朱印〕⇒上月蘭左衛門）
- (3) 宇和島伊達文化保存会所蔵『元禄八年 御家中由緒書 上』所収の由緒書の下書きか控えと推測される。
- (4) 宇和島伊達文化保存会所蔵『享保六年 御家中由緒書 二』所収の由緒書の下書きか控えと推測される。
- (5) 「一 同（寛政八—引用者注）年八月四日、妻出産男子出生之事」（『明和七年～文政十三年 由緒書』上月新五兵衛の項）とある。
- (6) 前稿（〔丹羽 2017〕）で「シゲ」としたが正しくは「シナ」である。ここに訂正する。
- (7) 宇和島伊達文化保存会所蔵、〔近代史文庫宇和島研究会 1978〕。
- (8) 注（7）に同じ。
- (9) 宇和島伊達文化保存会所蔵、〔近代史文庫宇和島研究会 1979〕。
- (10) 宇和島伊達文化保存会所蔵、〔近代史文庫宇和島研究会 1980〕。
- (11) 〔丹羽 2017〕において、宇和島伊達文化保存会の仙波ひとみ氏のご示教により 5 回をとしたが、隠居直前の 1 回を加えて 6 回とした。



- (12) 戦時中の疎開に関しては、新納桂氏の談話に基づく。
- (13) 前稿（〔丹羽 2017〕）では「次男」としたが、新納桂氏によれば榮は三男。
- (14) 初版時の住所は「東京市下谷区茅町一丁目一番地」、再版（大正 7 年 2 月）時は「東京市赤坂区新町三丁目拾九番地」。
- (15) 〔山本経天 2004〕による。
- (16) 『屋久町郷土誌』の時哉関連の記事については、山口まゆみ氏のご教示による。
- (17) 新納桂氏による。
- (18) 国立公文書館蔵「任免裁可書」（任 B01412100）。
- (19) 床次正精のほか、能勢一清、内山一観の画業については〔永田・山西 1998〕参照。
- (20) 前稿（〔丹羽 2017〕）で新照院を紹介した際、「城山との間に JR 日豊本線が走っており、……」と書いたが、「日豊本線」は誤りで、正しくは「鹿児島本線」である。ここに訂正をする。
- (21) 朝太郎の生没年は〔系図〕には記載がないため、上月一香氏からご教示を得た。
- (22) 「井谷家写真帖紹介表」愛媛県歴史文化博物館（同館ホームページ [https://www.i-rekihaku.jp/magazine/pdf/14\\_zuhyo.pdf](https://www.i-rekihaku.jp/magazine/pdf/14_zuhyo.pdf) による）。
- (23) 代表の難波経幸（蘆荻）のほか、阿世知金千代（國良）、重永義榮（紫雲山人）、唐鎌南次郎（冀北）、牧清虎（曉村）、五代貞直（香軒）、松下壯之介、上月朝太郎（朗山）、木原巳之介（柁山）、池田米男（兵右衛門）、鹽田武彦（淡水）、橋口勇（天萍）、篠崎雄蔵（稍葉）の 12 名。大正 3 年時点での鹿児島新聞社の社員は 45 名（うち 5 名は支局駐在）であり、4 分の 1 が編纂に参加したことになる。
- (24) 『読書の友』第 10 号。
- (25) 上月一香氏のご教示。新納榮の家と関係があるかどうかについては不明である。後考を期したい。
- (26) 元鹿児島大学附属図書館勤務の森園壽氏による。同館の「図書原簿」には「検収日 89/10/05（手書きで「9/29」と訂正）中山使聘礼之図：1」とある。裏打、軸装する際、錯簡が生じたことは〔丹羽 2017〕で述べた。
- (27) 薩摩藩と宇和島藩は上屋敷が比較的近いこともあり、日常的に藩主の交流が見られたようである。井上淳氏が紹介されているように〔井上 2016〕、勤番で龍土屋敷に詰めていた三浦平次左衛門義陳の寛延 3 年（1750）9 月 13 日の日記に「一義陳事薩摩守様へ御使者相勤ル、鮮鯛二枚被進……」とある。伊達村候（詩歌を好み学問を奨励した）の使者として薩摩藩邸に鯛を持参したもの。当時の薩摩藩主は島津重年。

# 【参考文献】（五十音順）

- 井上淳 2016 「宇和島藩江戸勤番武士と留守家族」『伊豫史談』380
- 宇神幸男 2011 『宇和島藩』現代書館
- 愛媛新聞百二十年史編纂委員会編 1996 『愛媛新聞・百二十年史』愛媛新聞社
- 芳即正 1993 『島津斉彬』吉川弘文館
- 近代史文庫宇和島研究会編 1978 『宇和島藩庁・伊達家史料 4 家中由緒書 上』近代史文庫宇和島研究会
- 近代史文庫宇和島研究会編 1979 『宇和島藩庁・伊達家史料 5 家中由緒書 中』近代史文庫宇和島研究会
- 近代史文庫宇和島研究会編 1980 『宇和島藩庁・伊達家史料 6 家中由緒書 下』近代史文庫宇和島研究会
- 近代史文庫宇和島研究会編 1982 『宇和島藩庁・伊達家史料 9 記録抜書 伊達家御歴代記 3』近代史文庫宇和島研究会
- 櫻島大爆震記編纂事務所 1915 『大正三年櫻島大爆震記』（五版）
- 所崎平編 2011 『明治 11 年～18 年 鹿児島市新照院 児玉宗之丞日記 上巻 一明治の生活がよくわかる一』南日本新聞開発センター
- 所崎平編 2012 『明治 19 年～26 年 鹿児島市新照院 児玉宗之上日記 下巻 一明治の生活がよくわかる一』南日本新聞開発センター
- 永田雄次郎・山西健夫 1998 『薩摩の絵師たち』（かごしま文庫 43）春苑堂書店
- 丹羽謙治 2017 「上月行敬筆『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』について―鹿児島大学附属図書館本と鹿児島県立図書館本のあいだ―」『雅俗』16 雅俗の会
- 丹羽謙治 2018 「郷土史料の充実」丹羽謙治・多田蔵人編 2018 『鹿児島 書物と図書館の近代―〈知〉の集積と展開―』鹿児島大学附属図書館
- 南日本新聞社 1981 『南日本新聞百年志』南日本新聞社
- 屋久町郷土誌編さん委員会 1995 『屋久町郷土誌 第二巻 村落誌 中』屋久町教育委員会
- 山本経天 2004 「近代中国における中等教員養成史研究」（神戸大学 博士論文）

# 【謝辞】

本稿を執筆するに当たり、次の機関および各氏にご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

上月晶、上月一香、内景子、新納桂、新納瑞穂、井上淳、山西健夫、橋口亘、仙波ひとみ、山口まゆみ、森園壽  
鹿児島大学附属図書館、鹿児島県立図書館

最後に、絵巻の作者を特定する端緒を与えていただいたゼロックス株式会社に感謝の意を捧げたい。